

## 雑 感

浅海重夫

正月休みに見たテレビと新聞記事から、二、三の雑感を。その一、昨年故人となった名優チャプリンをしのんで、往年の名画面をいくつか見ることができた。小学生の頃に見覚えのあるなつかしいキッドの場面は、とくに印象的だった。ところで、ある報道によると、幼少の時代を貧困な家庭で過ごしたチャプリンは、ただ金持ちになりたいという動機から俳優を志し、人間は平等だとの思想の上に笑いと涙をさそう至芸を大成させたという。一方、一億ドルともうわさされる資産については明らかにされず、その巨額の富が社会福祉や公益事業に投入されたというような話はほとんどきかれな。それが真相なら、社会の底辺を金もうけのタネにしたにすぎないこの名優への評価は、一きょに崩れ落ちてしまったと云わざるを得ない。残念というより裏切られたような思いが先に立った。

その二、身代金強奪事件のはしりと云われた、リンドバーグ大佐の長男誘拐犯を裁く裁判が、テレビドラマで演じられた。これを見れば誰しも、裁判とは検事と弁護士が頭の良さと口のうまさで勝負するゲームのようなものと思う。真実は一いつしかなく、真犯人はそれを知っているのに、またあれだけの証拠が示されながら、容疑者(すなわちこの事件の真犯人)が自白しない限り、事件は未解決のままやむやみにされたという厭然としない気持ちが残る。やがて公判をむかえるはずのロッキード事件の場合は、構造汚職とも云われて事件の性質は全く違うけれども、一そう派手なゲームをみせつけられる覚悟を今からしておかねばなるまい。被告側はスピード違反でたまたまつかまったドライバーと同じく、みんなやっているのに何故おれだけが、と運の悪さを心中ぼやきながら、つかまえた法の番人を憎んで罪の意識も持たないかもしれない。まして現行犯でないから、黒を白と云いくるめる辯護人を多額の報酬でやとい、状況だけで容疑者よばわりは人権じゅうりんだと逆襲することもできる。だからこのゲームは証拠不十分で引分けと予想しておくのが無難だと思うことにした。

その三、何といっても最大の関心は、大学入試と教育制度の改革案に関する新聞紙面に向けられた。各界の有識者十人の改革案はまさに十人十色で、共通点は現状ではダメだということだけ。ただし同紙面にある全国世論調査の数字では、「今の教育に不満はない」が約3割、受験制度についても「現状でよい」が7%となっている。さきの十人の意見のうち、大学出を採用する側の意識革命を必要とするもの、教育に対する教師の姿勢や親の子供に接する態度が問題だとするもの、さらに若者たち自身の自觉を求めるなどの提言を除けば、幾つか出された具体的な改革案——入試を全廃せよ、あるいは卒業制度をなくせ、授業を午前中だけにして午後は創意を伸ばすためにやりたいことをさせよ、小学校時代に1年間北海道の自然の中に自由な生活をさせる等々——は、それぞれ優れた案だが実現性に乏しいことに気づく。またそれらの改革案に共通点がほとんどないことは、問題の難しさを暗示している。文部省がどれか1つを採用して改革にふみ切ったとしたら、他の意見を持つ人は皆そっぽを

向くだろう。教育とは可能なことから少しずつ改めてゆくべきものではないか。そのステップとして来年度から国立大学入試に共通一次試験が実施される運びとなったが、これにもすでに多くの立場から批判の声があがっている。大学人の中には、どうせ首尾よくゆくはずがないと冷笑の眼で見ている者がある。そしてその人たちに入試や教育制度に対する改革の熱意があまり感じられないのは、ひが目であろうか。「現状でよい」とする7%の中には、意外に大学教授たちが多数含まれているのかも知れない。

## スンドボリイ教授の来日

式 正 英

スウェーデン、ウプサラ大学のオーケ・スンドボリイ教授は、河川地形学者、1921年の生まれである。同大学理学部副学部長、自然地理学教室主任、アカデミー会員とならべると近付き難い権威を感じずるが、碧眼、銀髪、長身のケネディー、カーターに似た温容の紳士で親しみ易い人である。夫人も学生時代は生物地理学を専攻され、穏かな可愛いらしいタイプの人柄である。この御夫妻が昨年1977年10月11日から11月24日まで来日された。スンドボリイ教授夫妻の来日と私との間には、いささか関連があるのでその辺に触れてみたいと思う。

人の縁とは不思議なものである。1972年の半年間のヨーロッパ滞在を、私は初めストックホルム大学のホッベ教授の所だけにしぼって計画していたが、うまく連絡がとれず、そのためミュンヘン大学とウプサラ大学に夫々3ヶ月ずつ滞在する結果になった。初めはウプサラには数日遊びに行く程度に計画していたのだが、スンドボリイ教授と連絡がとれるようになってからは考えが変わった。「君は（ストックホルムのような）大都会の喧騒を好むか、静かに勉強できる環境を選ぶか」という殺し文句のお手紙を頂くに及んでは、ウプサラ滞在の決意を固めない訳にはいかなかった。

ウプサラ大学はスウェーデンでは最も権威があり、ストックホルム、ルント、ヨーデボリイ等各地の大学の教授陣の多くはウプサラの出身者と言っても過言ではない。植物学者リンネを始め、世界的に著名な学者を輩出しているし、昨年は創立500年祭が行なわれたと云うから、その重味は漸く100年祭を迎えた日本の大学の比ではない。日本からの地理分野の研究者の長期滞在者は私が初めてであった。スンドボリイ教授は、滞在中の私の宿舎の世話や、私の申し出に悉く応えて下さって、嫌な顔一つされたことはない。休日には家族連れハイキングに招待して下さったりして、私の無聊を慰める気遣いまでして頂いた。とくに教授自ら私だけを案内して、御自分のフィールドのクラールヴエン川流域を、三日がかりで連れ歩いて下さったのには感激した。

スウェーデンで直接お付き合いさせて頂いて判った教授の人柄や学識は、是非日本に来て頂いて多くの同学の士に知って貰いたいと考えるようになった。そこで同年8月カナダでの国際会議に出席された都立大の矢沢大二教授にこの件をお話しして、御考慮いただくことにした。矢沢教授は帰国後、奔走されて早速招待を試みられたが、直ぐには実現しなかった。続けて同教授が中心となって学術振興会の招聘研究員として申請し、三年目に漸く実現した訳である。私のウプサラ滞在の後、都立大の